

日本ラテンアメリカ学会

会 報

No. 13

1983年10月10日

第13号 目 次

1. 理事会報告

2. 学術・文化情報

3. 会員活動報告

4. 事務局から

○ラテンアメリカ研究センター めぐり

1 第17回理事会報告

1983年7月20日 13:00～15:30

於東京番町共済会館，出席理事6名

*報告事項

i) 年報4号の編集 編集委員会は6月5日に第一回会合，7月20日午前中に第二回会合を開き，編集の基本方針（欧文原稿を中心に編集し広く海外に配布すること），募集の要領（会報12号16頁）等を決定し，原稿依頼先について案を出しあつた。今後の日程は，8月15日に応募締切，10月31日に原稿締切の後，11月初旬に第三回会合を開いて審査にかかる予定である。

ii) 年報3号を発送した。

iii) 会報12号を編集・印刷・発送した。

iv) 定例研究会 西日本部会は7月16日，南山大学において第9回研究会を開催した。

*審議事項

i) 正会員3名，準会員1名の入会を承認し

た。正会員1名の退会を同じく承認した。

ii) ラテンアメリカ研究者名鑑 欠落を補い
いよいよ充実させる方向で検討することを
決定した。

iii) ラテンアメリカ・カリブ地域研究国際連
盟(FIEALC)について 本年10月，
同連盟はカラカスにおいて第一回大会を開
催する。松下洋理事に本学会を代表して出
席することを委嘱し，同大会に上智大学イ
ベロアメリカ研究所を代表して出席するア
ンドラーデ理事に，松下理事を補佐するこ
とを委嘱することを決定した。

iv) 第5回定期大会 1984年6月上旬に
南山大学で開催することを確認し，大会組
織委員長に松下洋理事を任命した。

2 学術・文化情報

○アメリカ史研究会の紹介

乗 浩子(世界経済調査会)

アメリカ史研究会は，東京周辺地域の北米
史研究者を中心に，1975年に結成された。従
来の歴史解釈にとらわれずに，対等で自由な
立場から問題提起を行って，アメリカ史像の
全面的再検討をめざす組織であるが，とくに
注目されるのは，「アメリカ」をアメリカ合
衆国に限定せず，カナダやラテンアメリカを
含む全米州を捉え，ラテンアメリカ研究者及
び組織との交流を呼びかけていることである。

こうした問題意識から，研究会発足以来多
くのラテンアメリカ研究者による報告が行わ
れ，機関誌『アメリカ史研究』(1978年創刊)
にも殆んど毎号ラテンアメリカに関する論文
が掲載されている。また関西・中京地区など

ラテンアメリカ研究センターめぐり (11)

— 愛 知 県 立 大 学 —

愛知県立大学は昭和41年に発足し、その2年後の昭和43年に水谷清教授等を中心として、外国語学部スペイン学科が増設された。当大学には「ラテンアメリカ研究センター」と呼ぶべきものはないとはいえ、このスペイン学科においてラテンアメリカ関係の教育・研究活動が行われている他、後記のように文学部一般教育学科でもラテンアメリカに関わる研究活動が行われている。

毎年約40名の学生を受入れる外国語学部スペイン学科は、語学教育ばかりでなくイスパニアとラテンアメリカの歴史・文化について広く知識をもつ人材を養成することを期し、そのためにゼミナールや研究各論に重きを置き卒業論文を必修としている。スペイン学科の学生のうち3-4割はラテンアメリカを専攻地域として選んでおり、ラテンアメリカ関係の卒業論文・自由研究が数多く生まれてきた。

スペイン学科で開講されているもののうちラテンアメリカに関わるものとしては、外国語学部の野田隆助教授の担当するラテンアメリカ研究概論及び研究講読の他、ラテンアメリカの「歴史」、「社会・経済」、「思想・政治」、「言語・文学」についての研究各論がある。「ラテンアメリカの歴史」では同じく野田助教授がメキシコ現代史研究を、「社会・経済」では南山大学の富野幹雄助教授がブラジル社会経済史を担当している。また「思想・政治」として南山大学の松下洋助教授によるアルゼンチン政治史、「言語・文学」として東京外国語大学の桑名一博教授による現代ラテンアメリカ文学が開講されている。この他上記教官によるラテンアメリカ研究演習に加え、南山大学の松下マルタ助教授によ

る政治思想史に関する特殊講義、また現在津田塾大学の岡部廣治教授や世界経済調査会の乗浩子氏による集中講義も行われてきた。尚、昨年は、メキシコ国立人類学歴史学博物館アステカ室長のフェリペ・ソリス・オルギン氏による講演会が開かれた。

愛知県立大学附属図書館におけるラテンアメリカ関係の書籍雑誌類の収集は十分なものとは言い難いが、歴史関係、特にメキシコの独立以降のものが主体となっている。

当大学のラテンアメリカニストによる研究会・出版活動等は行われておらず、個別研究活動に依っている。野田隆助教授（歴史）は19世紀後半から20世紀初頭にかけてのメキシコ史に関心を持ち、特にメキシコ革命をめぐる諸問題の研究に従事してきた。同じく外国語学部スペイン学科の堀田英夫講師（イスパニア語学）はスペイン語の地域差に対する関心から、ラテンアメリカのスペイン語また原住民言語を研究対象としている。文学部一般教育学科の岡田篤正助教授（地学）は変動地形に対する関心から、中部アンデスの活断層や同山脈の隆起、また南部チリの氷河・周氷河地形の研究に携わってきた。同じく一般教育学科の小泉潤二講師（人類学）は、中米原住民文化に対する関心に基づく象徴人類学的研究、特に宗教行動と経済行動の解釈学的研究に従事している。尚、ラテンアメリカの文芸思潮を専門とされる桑名一博教授（現在東京外国語大学）は、昨年度まで当大学に在籍された。

以上、スペイン学科に関しては野田助教授及び外国語学部事務室に御教示頂いた。

（小泉潤二 記）

各地の研究者と合流して1泊2日を過す「アメリカ史研究者夏期セミナー」においても、南北アメリカ的視点からプログラムが組まれてきた。今年のセミナーは8月30-31日に約80名が参加して京都で開かれ、辻豊治が「1920年代におけるペルー革命論争 — ナショナリズムとインターナショナリズムの間」を報告した(自由論題 シンポジウムのテーマは「アメリカ社会の統合」)。アメリカ史研究者のラテンアメリカその他地域に対する旺盛で幅広い関心には、常に圧倒されるものがある。

第三世界の一角を構成するラテンアメリカは、近代世界の産物たる新世界の一員でもあり、合衆国の存在が大きいだけに、北米史研究者との情報交換や、北米との比較・相互依存関係の究明が不可欠である。数多くの国を擁するラテンアメリカを対象とする研究が、次第に精緻化・細分化され、「もはや“ラテンアメリカでは” という一般化をやめよう」という声も聞かれる今日であればこそ、改めてグローバルな視点からラテンアメリカ史を検討する一環として、アメリカ史研究会への積極的参加をお勧めしたい。

以下はラテンアメリカ関係の研究発表の報告者とテーマである。

《アメリカ史研究会》

(1975年)加茂雄三「ラテンアメリカにおける軍部の新しい役割」(1977年)浅野麻利子「『開発』政策と『発展』理論の相互関連性について—『進歩のための同盟』をめぐって」、(1979年)加茂雄三「中米・キューバの最近の動向について」、長津久子「1930年代初頭キューバの百日政府の崩壊」、恒川恵市「従属アプローチの発展と問題点—A. G. フランクをこえて」(1980年)畑恵子「メキシコ・ディアス期の労働運動とメキシコ自由党の影響をめぐって」(1982年)松下冽「1930年代メキシコの労働運動、上村直樹「アメリカの善隣外交とメキシコ—1938年カルデナス政権の石油国有化をめぐって」(1983年)鈴木茂「ブラジルにおける奴隷制解体と〈自由労働〉—南東部コーヒー地帯の成長と労働問題」

《アメリカ史研究者夏期セミナー》

第3回(1978年)野田隆、加茂雄三、シンポジウム「アメリカ帝国主義の成立をめぐって」

に参加、福本保信「ハイチ革命」第4回(1979年)青木芳夫「組合国家主義と政治疎外—カルデナス期メキシコ研究の一課題」第5回(1980年)乗浩子「ラテンアメリカの宗教と政治—カトリック教会の動向をめぐって」第6回(1981年)岡部広治、シンポジウム「多人種社会における民衆史研究の現状と課題」に参加、宮野啓二「アングロアメリカ植民地とラテンアメリカ植民地の比較史的考察」第7回(1982年)長津久子(『アメリカ史研究』第6号参照)。

《『アメリカ史研究』》

第2号(1979年)野田隆「メキシコの鉄道建設と鉄道政策(1837~1910)」, 国本伊代「日本におけるラテンアメリカ史研究の動向と問題点」第3号(1980年)乗浩子「現代ラテンアメリカの国家と社会」第4号(1981年)畑恵子「メキシコの農民と国家—ベラクルス州のアグラリスモを中心として」第5号(1982年)岡部広治「ラテンアメリカにおける人種と民族」第6号(1983年)阿部久子「キューバ砂糖産業におけるコロノとブラセーロをめぐる覚え書—ユナイテッド・フルーツ会社の場合を中心に」(アメリカ史研究会についてのお問い合わせは、立教大学文学部富田虎男研究室まで)。

○ラテンアメリカ女性学研究会

1970年代に世界中に広がったウーマン・リブや1975年の国際婦人年を契機として、近年内外で女性問題に対する関心が高まっている。このような関心は、女性に対する差別を徹廃し、女性の地位を向上させようという実践的な分野だけにとどまることなく、これまで全く捨象されてきた女性の視点から、既存の学問体系の再構築を試みる動きにまで発展している。また、その定義ははまだ明確ではないが、女性学という新分野も市民権を獲得しつつあり、日本の大学でも女性学という名称の講座が開かれるに至っている。

こうした状況を背景として、ラテンアメリカの女性に関心を持つ10余名の有志によって、1981年5月に発足したのがラテンアメリカ女性学研究会である。本研究会は原則として隔月に開催される研究会を中心に活動を進めて

いる。すでに10回の研究会が開かれ、次のような発表が行なわれた。

第1回(1981年5月30日) 研究会の今後の運営方針

第2回(1981年7月25日) 1.マルタ・松下氏(南山大)「アルゼンチン社会における婦人の地位」 2.奥山恭子氏(早稲田大)「メキシコにおける婦人の法律上の地位」

第3回(1981年10月24日) 1.ビルヒニア・メサ氏(メキシコ国立自治大学)「メキシコにおける女性の地位」 2.国本伊代氏(中央大)「メキシコ女性解放運動の系譜」

第4回(1981年11月28日) 三田千代子氏(サンパウロ大学大学院)「私のみたサンパウロの女性たち」

第5回(1982年4月17日) 1.クリスチーナ・福嶋氏(ポルトガル大使館)「ブラジル女性について」 2.ブツガン・スミ氏(サンパウロ州立パウリスタ大学)「日系人女性のブラジル社会への同化」

第6回(1982年7月3日) 1.大林道子氏「女性差別の理論」 2.田村さとし氏(お茶水大大学院)「文学からみたチリの女性達」

第7回(1982年10月9日) 1.ソニア・細野氏(麗沢大)「チリの女性」 2.井上輝子氏(和光大)「メキシコの女性」

第8回(1982年12月4日) 1.国本伊代氏(中央大)「ボリビアにおける日系人開拓村の女性たち」 2.乗浩子氏(世界経済調査会)「ラテンアメリカの女性の地位と役割」

第9回(1983年4月23日) 1.石原幸枝氏(上智大大学院)「ペルーの女性」 2.研究成果のまとめについての検討

第10回(1983年6月18日) ヴェンデリーノ・ローシヤイタ氏(上智大)「カトリックと女性」「ブラジルの女性」

本研究会のメンバーはラテンアメリカの歴史、政治、法律、文学、国際関係論などを専門としており、残念ながら女性問題の専門家は含まれていない。そのため、これまでの研究会では、ラテンアメリカ諸国出身者や現地での生活体験者の話を聞き、大まかな知識を得ることに力点をおいてきた。しかし、研究会発足後すでに2年以上が経過しているので、今後はまず①ラテンアメリカ主要国について女性参政権運動史や法律上の地位といった基

本的な事項を整理し、その上で②ラテンアメリカ女性の文化的、社会的、政治的、経済的特質を明らかにする、という手順で、研究会としての成果をまとめる方向に進めていくつもりである。

なお、次の研究会は下記のように予定している。

時：1983年10月15日 午後1時半～5時

所：上智大学上智会館

報告者 1.角川雅樹氏(東海大)「メキシコ人と日本人—心理学の立場から—」
2.三田千代子氏(上智大)「ブラジルにおける女性解放の歩み」
(文責 畑 恵子)

○ イベロアメリカ研究所の活動予定

1. 第7回ラテンアメリカ事情講「ラテンアメリカの美術・音楽・演劇」の開講

昭和58年10月4日～59年1月24日(毎週火曜日)全14回

講師：美術 神吉 敬三(上智大学)

高山 智博(")

音楽 高場 将美(ラテンアメリカ音楽史家)

演劇 清水 憲男(上智大学)

下川恵美子(早稲田大学)

1. シモン・ボリバル生誕200年記念展示会

ベネズエラ大使館と共催

昭和58年11月10日～11月30日

於：上智大学内、上智会館

1. 出版物

沢田エミリオ, Latino America y Japon: Administración Compañía (I L A シリーズ No 8) 昭和58年9月発行予定本文はスペイン語、日本語の要約つき。

上智大学イベロアメリカ研究所

松丸 美佐子

3. 会員活動報告

○ シモン・ボリーバル生誕二百年記念 学会に参加して

シモン・ボリーバルは1783年7月24日にカラカスで生まれた。その生誕二百年にあたる今年、彼の活躍で独立を達成したいわゆる「ボリーバル諸国」(Estados bolivarianos)、すなわちボリビア、コロンビア、エクアドル、ペルー、ベネズエラの五ヶ国では数多くの多彩な行事が催されている。とりわけベネズエラは周知の経済・敗政危機にもめげず、大変な熱の入れようである。

それら記念行事のひとつ Congreso Bicentenario de Simón Bolívar はベネズエラ国立歴史アカデミア主催の下に去る7月17日から24日にかけてカラカスで開かれた。会場は各種国立アカデミアの本部が集まっている建物で、市の中心のボリーバル広場のすぐ近くにある。かつてはフランシスコ会の修道院だったという、中庭のあるコロニアル様式の建物だった。

事前に郵送されてきた会議のプログラムによると、主催国以外からの報告者はドイツ、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、コロンビア、キューバ、チリ、スペイン、フランス、イギリス、イタリア、オランダ、メキシコ、ペルー、ポーランド、スウェーデン、チュニジア、ソ連、米国の多岐に亘っていたが、このうちオーストラリア、チリ、オランダからの参加予定者は不参加に終わり、同じく G. Furtado, M. Acosta Saignes, B. Bennassar, O. Paz 等の姿も最後まで見当たらなかった。しかしながら、G. Arciniegas, G. Freyre, J. Lynch, F. Mauro, F. Morales Padrón, D. Ramos, R. Romano, M. Mörner, A. Tovar, A. Usllar Pietri といった顔触れは、会議に高い学術性を与えるのに充分すぎるものだった。

いくつかの分科会に分かれた20日を除いて、会議はすべて統一主題の下に会場内の講堂一ヶ所で行なわれた。主題の一部を紹介すると「S・ボリーバルの世界」、1780-1830 年

大西洋地域における思想・人間・商品の往来、
「今日の展望から見たボリーバル」、
「ボリーバルの普遍性」等であった。ただし、各報告の内容は必ずしも決められた主題に厳密に符合するものばかりではなかった。また20日の各分科会では「政治行政構造」、
「軍部」、
「ナショナリズムの生成」、
「エリートと革命」、
「奴隷制」その他の主題に沿って報告と議論が展開された。なお、会議の公用語は西語と英語(同時通訳付)に予め決まっていたが、仏語での報告も二例あった。

報告者のいくつかの変更があったものの、全体として会議は予定通りに進行した。特に各セッションの開始と終了がほぼ定期通りだったのは、正直な所驚きだった。理由は第一に大部分の報告者が予め原稿を用意し、これを与えられた時間内で読むのに限ったことと、次に一般参加者の質問もこれまた予め用紙に書いて準備させ、後でこれを読み上げる形式を採ったためだった。この二点はいつも時間のずれこみに悩まされる我々の学会でも借用してみてもどうだろうか。

プログラムの合間を使ってある午後参加各国から一名の代表が出る形でいろいろな意見の交換がなされた。その折、各国のラ米研究者の氏名及び論文のリストの作成と交換の必要性が強く指摘された。我々の場合、過日作成された研究者名鑑の欧文版を早急に用意すべきではないかと思われた。

会期中たまたま手にした朝日新聞で、今日の技術革新からして将来研究室に居ながらにして遠距離の会議参加が可能になる日も近いという記事が目についた。早速このことを参加者の幾人かに伝えると、異口同音に「たとえそうなくてもこの種の国際会議の必要性は変わらないだろう。我々は相手の研究論文を知るといふよりは、お互いに顔見知りになりことばを交すためにこうして集まるのだから」という答えが返ってきた。国内国外を問わず、学会の意義は確かにこの辺にあるのかも知れない、この意味で今回のカラカスでの出会いは私にとってことばに尽せないほど有意義だった。このような機会を与えてくれたベネズエラ国立歴史アカデミアと日本ラテンアメリカ学会理事会に深く感謝したい。

小林 一宏

- 「メキシコ大統領ポルフィリオ・ディアス蔵書コレクション」を筑波大学が購入

『筑波大学付属図書館報』9巻1号(1983年6月)所載の山田陸男執筆記事が伝えるところによれば、同大学は文部省の大型コレクション費をうけて上記コレクションを購入、同大学中央図書館に納入した。配架は一括配架で、一括カタログが作成される予定である。

1911年5月25日、チワワ州ではマデロ派が政府軍を圧倒し、メキシコ市でも状勢は不穏となって、ディアスについては辞任、フランスへ亡命すべくベラクルスへ去ったが、この時官邸パラシオ・ナシオナルに残っていた蔵書・文書類がこのコレクションである。その一部はメキシコ市のイベロアメリカナ大学が入手したが、残りの大半が米国在住のディアスの孫娘の所有に帰していた。このほどある米国人の手を経て売りに出たのを買ったものである。

分量は439タイトル、約1756点。主たる内容は下記の通り。

- 蔵書261タイトル、326点
- 1815年—1910年のメキシコ連邦(および中央)政府の指令・通達・布告・命令(オリジナルまたはコピー)約138点。
- 公文書類3タイトル、1,022点。
 - 1) 1805年—1880年のオアハカ州の政治・経済・人事に関する手稿40点。
 - 2) 1873—74年のハリスコ州の軍隊に関する報告書915点。
 - 3) 1910年6月—7月、内相兼副大統領ラモン・コラル宛に各地の官吏から送られた電報67通。

- 日本学術会議第13期会員選挙選挙日程の変更について

日本学術会議は6月20日第90回総会を開催し、本年度の選挙日程を約40日間繰り下げることを決定した。これは、日本学術会議法改正法案の国会提案の関係で始動を暫く見あわせていたためである。変更後の日程は以下の通り。

- 1983. 8. 17~26 有権者名簿縦覧。
- 8. 27~9. 10 立候補受付
- 8. 20~10. 1 候補者公示

- 11. 11~11. 21 投票用紙発送
- 12. 19 選挙(投票締切)

*会員の皆様もれなく御投票くださいますよう重ねてお願いいたします。

- 昭和58年度文部省科学研究費補助金による海外学術調査

[現地調査]

- 「南米ボリビア及びチリ・アンデス地帯の多金属型熱水鉱床に関する地質学・鉱床学的調査」(ボリビア, チリ) 上野宏共(東北大・理) 10名
- 「南部アンデス火山帯の地球化学的調査研究」(チリ, メキシコ, アルゼンチン, アメリカ) 小沼直樹(茨城大・理)11名
- 「ラテンアメリカの都市首位性拡大の諸要因に関する学際的研究 — メキシコ市の事例 —」(メキシコ) 細野昭雄(筑波大・社会工学系) 8名
- 「ボリビア国チャカルタヤ山での空気シャワー芯部の測定調査」(ボリビア) 俣野恒夫(埼玉大・理) 12名
- 「南アメリカの中南部雲霧林における種分化とその地史的起源に関する研究」(ボリビア, チリ) 西田誠(千葉大・理) 10名
- 「中南米、特にメキシコにおける肺吸虫症の病態生理学的研究」(メキシコ, アメリカ) 横川宗雄(千葉大・医) 9名
- 「環カリブ海地域における複合文化の比較研究 — アフリカ・アジア系社会・文化空間の変動過程 —」(パナマ, コスタリカ, キューバ, ハイチ, ドミニカ共和国, プエルトリコ, ドミニカ, グアドループ, マルチニーク, セントルシア, バルバドス, トリニダード・トバゴ, 仏領ギアナ, スリナム, ガイアナ, ベネズエラ, メキシコ) 山口昌男(東京外大・アジア・アフリカ研) 10名
- 「ブラジル・リオ・ドッセ湖沼群の陸水生生態学的特性と湖沼類型に関する研究」(ブラジル) 西條八東(名大・水圏科学研) 16名

- 「パタゴニア地域の氷河における水文・気象学的研究」(チリ) 中島鴨太郎(京大・防災研) 6名
 - 「南東太平洋諸島の地球物理学的研究」(仏領ポリネシア, チリ) 安川克己(神戸大・理) 8名
 - 「乾燥地域の農業開発にともなう耕地生態系の保全と生産性に関する調査研究」(メキシコ) 竹内芳親(鳥取大・農) 6名
 - 「南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究」(メキシコ) 野村暢清(九大・文) 9名
 - 「発展途上国社会への日本移民の環境適応, 同化, および貢献に関する実証的研究 — ボリビアにおける日系人社会の実態調査を中心として —」(ボリビア, パラグアイ, アメリカ) 若槻泰雄(玉川大・農) 7名
 - 「中央アンデス農牧民社会の民族学的研究 — ボリビア高地の環境利用と異民族間関係 —」(ボリビア) 友枝啓泰(国立民族学博物館・第4研究部) 8名
- [調査総括]
- 「南米における赤色土地帯の農業生態学的調査」 田中明(北大・農)
 - 「アンデス中部地域の古・中生界の生物層序学的研究」 坂上澄夫(千葉大・理)
 - 「古代ペルー人の歯科人類学的研究」 三浦不二夫(東医歯大・歯)
 - 「南米の哺乳類の進化に関する古生物学的研究」 高井冬二(進化生物学研究所)

○ 近着会員業績

(1983年6月から8月までの到着分。)

[籍] 小林仁, 梅村芳樹共著『中南米の地下作物探索導入調査報告書』(熱帯農研センター資料No 59, 122頁, 1982年)

[抄録] 1980年10月~12月に実施された中南米7ヶ国(メキシコ, コスタリカ, パナマ, コロンビア, エクアドル, ペルー, ブラジル)への調査報告。採集材料のリスト, 写真35葉, 訪問した関係研究所の品種コレクションのリスト, 2ヶ月間の調査日誌を含む。対象作物は主としてカンシヨ, キャッサバ。

日誌は各地の自然, 農業, 人々の生活など旅行記を兼ねている。

[誌] 『史友』15号(青山学院大学史学会, 1983年4月) A5判104頁 執筆者 真鍋周三「十八世紀インカの反乱と文献目録の紹介 — トゥパック・アマルの反乱を中心に —」12-36頁, うち文献目録11頁

[誌] 『青春と読書』(集英社)

○83号(1983年5月)特集これがラテンアメリカだ! 執筆者 増田義郎・高野潤・松下洋・米倉守・浜田滋郎

○84号(1983年7月)『ラテンアメリカの文学』刊行関係記事若干所載

[抜] 山崎春成, ラテンアメリカの新興工業国 — ブラジルとメキシコ — 『現代世界経済と新興工業国』大阪市立大学経済研究所所報第32集(東京大学出版会, 1983年)

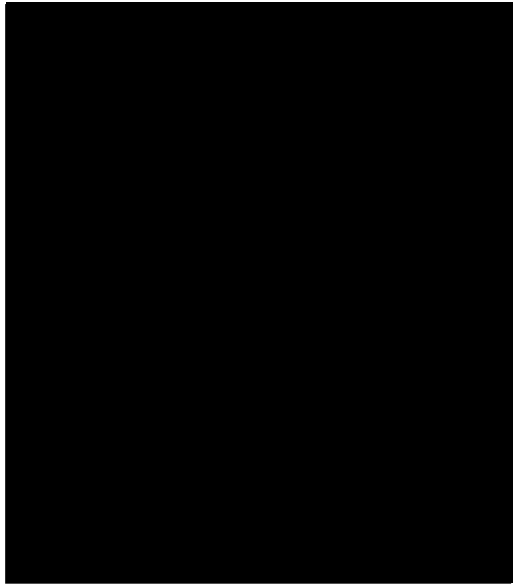
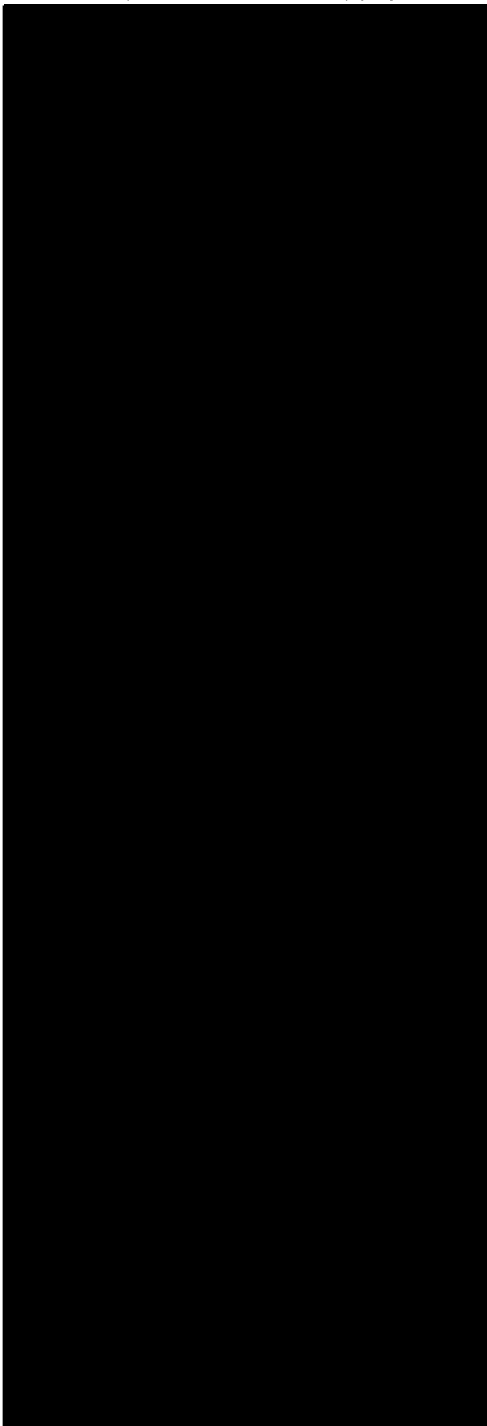
[冊] Conniff, Michael L., Black Labor on a White Canal: West Indians in Panamá, 1904-1980 (Research Paper Series No 11, Latin American Institute, Univ. of New Mexico, May 1983)

[冊] Froehlich, Jeffery W., & Schwerin, Karl H., Conservation and Indigenous Human Land Use in the Rio Plátano Watershed, Northeast Honduras (Research Paper Series No 12, Latin American Institute, Univ. of New Mexico, June 1983)

[冊] Bales, Fred V., Comparing Media Use and Political Orientation among squatter Settlers of Two Latin American Countries (Research Paper Series No 13, Latin American Institute, Univ. of New Mexico, June 1983)

4. 事務局から

i) 新入会員(第17回理事会承認)



iii) 会費振込先

- 郵便局振替口座 東京1-13630
(日本ラテンアメリカ学会名義)
- 第一勧業銀行渋谷支店普通預金口座
1262358(日本ラテンアメリカ学会
代表増田義郎名義)

iv) 会報を一層充実させるために、各地で開催されている研究会、会員諸氏の研究活動報告など、お送り下さい。

v) 著書・論文抜刷等をご寄贈ください。事務局にて整理・保管し、書誌を会報の「近着会員業績」欄に掲載いたします。業績に添えて著者抄録(書籍200字以内・論文100字以内)をお送りくだされば、書誌と一緒に掲載します。

vi) 原稿をお寄せいただきます時には、印刷の都合上、かならず20字詰横書きにしてくださいませよう願いたします。

No.13 1983年10月10日発行
日本ラテンアメリカ学会事務局
〒153 東京都目黒区駒場
3-8-1
東京大学教養学部8号館
中南米分科気付
☎03(467)1171
内線579